



羅針盤

2015年度 第9号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

2015（平成27）年9月19日発行

記念祭が終わった。長く見守ってきた人ほど、生徒の進歩に感心している。来場者も過去最高。手応えや充実感を味わえた人は、成功体験として記憶しよう。痛恨や後悔が残る人も、反省点を銘記しておこう。いずれにせよ、その経験を、体育祭をはじめ、部活でも勉強でも、次の挑戦に生かすことだ。そこに生じる連鎖が、君や君の属する集団を、大きく成長させてくれる。

「働きアリの法則」を聞いたことがあるだろうか。蟻の集団を観察すると、よく働く蟻が2割、普通に働く蟻が6割、全く働かない蟻が2割だという。その比率はどの集団でも変わらない。2割の働かない蟻を取り除くと、残った蟻が再編成され、常に「2：6：2」の比率が保たれるというのである。

気になってインターネットで調べたが、発見者も提唱者もわからなかった。経済学におけるパレートの法則とは違う。擬似科学や都市伝説の類かもしれない。にもかかわらず記憶に残るのは、人間社会にも思い当たる節があって、それを顕在化させてくれるからであろう。

そうであるとすれば、集団のうち、普通に働く個体が、一匹か二匹でも、よく働く個体になり、全く働かない個体が、一匹か二匹でも、普通に働く個体に移行すれば、その集団の相対的な位置づけは、飛躍的に向上することになる。もちろん、本能のままに生きる蟻には実行できない。が、理性を備えた人間には可能な方法論なのではないだろうか。クラスのうちの1人か2人が、それぞれ一つ上のステージに進めば、そのクラスの校内における位置づけが上がることになる。同じことを学校レベルで実行できれば、他校に対する豊多摩のポテンシャルも急激に上昇することになる。

君は何のために努力するか

内田 樹の本を読んでいたら、気になることを述べていた。世の中に「働かない若者たち」が増えているという問題について、「なぜ、そのような若者が生み出されていったのでしょうか？ なぜ、若者は働かなくなったのでしょうか」という問いに、次のように答えているのである。

若者が働かなくなったのは「努力すれば報奨が与えられる」という枠組みそのものに対する直感的な懐疑のせいだろうと思います。「みんなが争って求めている『報 奨』というのは、そんなにたいしたものなのか？」という疑念にとらえられているのです。（中略）

努力すれば「いいこと」があるよ、というタイプの利益誘導の最大の難点は、示された「いいこと」がさっぱり魅力的ではないという場合に、誰も努力しなくなってしまうということです。

私たちの社会は利益誘導によって学習努力、就業努力を動機づけようとしてきました。それが作り出したのがこの「働かない若者たち」です。

人間は自己利益のためにはあまり真剣にならない。これは多くの人が見落としている重大な真実です。自己利益は自分にしかかかわらない。「オレはいいよ、そんなの」というなげやりな気分ひとつで人間は努力を止めてしまう。簡単なんです。

人間が努力をするのは、それが「自分のため」だからではありません。「他の人のため」に働くときです。

ぎりぎりに追い詰められたときに、それが自分の利益だけにかかわることなら、人間はわりとあっさり努力を放棄してしまいます。「私が努力を放棄しても、困るのは私だけだ」からです。

でも、もし自分が努力を止めてしまったら、それで誰かが深く苦しみ、傷つくことになると思ったら、人間は簡単には努力を止められない。

自分のために戦う人間は弱く、守るもののために戦う人間は強い。

これは経験的にきわめて蓋然性^{がいぜんせい}の高い命題です。「オレがここで死んでも困るのはオレだけだ」と思う人間と、「《彼ら》のためにも、オレはこんなところで死ぬわけにはゆかない」と思う人間では、ぎりぎりの局面でのふんばり方がまるで違う。

それは社会的能力の開発においても変わりません。

自分のために、自分ひとりの立身出世や快樂のために生きている人間は自分の社会的能力の開発をすぐに止めてしまう。「まあ、こんなものでいいよ」と思ったら、そこで止める。でも、他人の人生を背負っている人間はそうはゆかない。

人間は自己利益を排他的に追求できるときではなく、自分が「ひとのために役立っている」と思えたときにその潜在能力を爆発的に開花させる。これは長く教育現場にいた人間として骨身にしみた経験知です。

内田樹『街場の憂国論』（晶文社、2013）330～2頁

若者が働かない原因を目的設定の錯誤に求めている。「自分のため」と考えると努力しなくなるという。

イチローと王貞治の対話が想起される。2007年年の初め、全盛期のイチローが、その前年のWBC*以来、久しぶりに王貞治監督に再会した。様々な質問の最後に、「現役時代、選手の時に、自分のためにプレーしていましたか、それともチームのためにプレーしていましたか」と訊いたのである。王監督は即座に答えた。

*WBC＝野球の世界大会(ワールド・ベースボール・クラシック)

「オレは自分のためだよ。だって、自分のためにやるからこそ、それがチームのためになるんであって、チームのために、なんていうヤツは言い訳するからね。オレは監督としても、自分のためにやってる人が結果的にはチームのためになると思うね。自分のためにやる人がね、一番、自分に厳しいですよ。何々のためにとか言う人は、うまくいかないときの言い訳が生まれてきちゃうものだからな」

それだけではない。イチローは、そのオフ、各界でトップに上り詰めている人に会うたびに、同じ質問をした。すると、異口同音^{いくどうおん}に「自分のためにやっている」と答えたのである。誰ひとり「まずはチームのためだ」とは答えなかった(石田雄太「メジャー7年目の境地。」(「Number」674、3/29号)44頁)。

どうだろう。見事な対立意見ではないか。どちらも、努力が発動するための必要条件を「…のために」という目的設定に求め、内田樹は「他の人のため」のほうが「自分のため」よりも努力できるとし、王貞治は「自分のためにやる人が、一番、自分に厳しい」という。両者の差異を先鋭化させれば、「他の人のため」が上か「自分のため」が上か、ということになる。君はどちらに共感するだろうか。

内田樹は、フランスの現代思想の専門家。著作が、大学入試にたびたび採用される。イチローや王貞治についての説明は、不要だろう。いずれも、間違ったことは言いそうにない。二者択一の問題ではないように思われる。

両者は矛盾しないとすれば、二つのパターンが考えられる。内田樹は、努力するのは、「自分のため」ではなく「他の人のため」の時であるとし、王貞治は、その「他の人のため」よりも「自分のため」のほうが努力するとするのだから、

A パターン＝ ①王の言う「自分のため」 ②「他の人のため」 ③内田の言う「自分のため」

B パターン＝ ①内田の言う「他の人のため」 ②「自分のため」 ③王の言う「他の人のため」

いずれにせよ、①と③の差違を説明できれば、全体が矛盾しないことになる。さあ、君はどちらが正しいと思う？ ①と③の違いは？

残念ながら、字数が尽きてしまった。以下、次号。

2016年度赤本到来

進路指導室に最新の年度別・大学別過去問集(赤本・青本・黒本)等が届き、整理して開架しました。購入予定の8割が揃いました。3年生は、2泊3日で借りられます。前年度までの旧版も同様です。下級生も一度見に来て下さい。

*赤本は教学社発行。青本は駿台文庫発行。黒本は河合出版発行。